

学びのコミュニティ研究会 15

平成27年10月24日14:00～
DE・あ・い・21（愛媛県愛南町）

開会挨拶 中尾 茂樹

少ない人数で和気あいあいとすすめていきたい。

参加者：16名（ケーブルテレビ撮影者1名含む）

自己紹介



基調講演

「子どもが地域でかがやくこと」 讃岐 幸治

地元で生産されたものを地元で消費することを地産地消という。教育も「地産地消」へ向かう。日曜など、農家の方々が市を開いて、自分が作ったものを売っている。消費者が消費者に売る。「おすそ分け」である。「知」についても同じ。今までは、出し方を知らず、「知」の便秘状態だった。どのように「おすそ分け」するかが重要である。どのように売りに出していくか、上手くいくと「すてたもんじゃない」と思える。地域に対する愛情がないとできない。

打って出るのがないと、自信がなくなってしまう。自分の所属しているところで褒められるのってくる。地域の歴史や文化をどのように子どもに伝えていくかが大切。愛南町は高知県との県境であるが、発想を変えると、県と県との真ん中にあるということである。自分の充足価値、能力を発揮できる場所があれば輝く。一人一人をどのようにスターにしていくか。他者と比べることなく、「私はこのようなものを持っている」という気持ちを根付かせていく。他と比べるということではだめ、地域の特色を生かし、地域の誇りをどう培っていくか。それには、公民館等で、「お前はこれがすごい」と一人ひとりを達人にしていけばいい。「オンリーワンづくり」である。

滋賀県へ行ったときの飲み会でのこと。とある先生に教えられた。「おまえすごか」と褒めてくれる。「すごか」と言っておいてからすごいところを考えていた。人間は、認められたいと思っている。それが伸びるということである。行政は、「意欲をもって取り組み」というが、これは逆である。頑張ってみて成果がでると、意欲が出てくる。何回やってもできなかつたら、意欲が出ない。業績価値というが高めていくためには必要。充足価値とは、地域で「ただそこにいるだけで勇気がわいてくる、ほっとする」安心できる集団をどう作るか。一人一人が違うということが前提である。

旅人が、韓国のある集落を訪ねたところ、なぜか村人の腕が曲がっているため、食事をしようとしても落ちる。したがって、みんなやせ細っていた。旅人が次の集落を訪れたところ、村人はふくよかであった。しかし、前出の集落と同様、腕が曲がっている。なんでふくよかなのか。食事のときは、曲がった腕を生かして、お互いに食べさせていた。お互いに助け合っている、相互扶助の関

係である。

昔は、カラオケでも、なんとなく手拍子をして同じ空間を共有していた。いまは違う。みんな違うが、おでんのように、ごった煮にしてぐらぐらさせると、筋肉は筋肉以上の味が、大根は大根以上の味が出る。

祭りなど、特にそうである。あの人は～がうまいから頼むとか、みんなが違うからこそ大きなものができる。あの人と私は違うからやりにくいという考え方の発想を変える。

「世界に一つだけの花」の歌詞、「ナンバーワンではなくオンリーワン」一つずつ言葉を並べていって歌詞をつくるが、重ね積み重ねると大きなものができる。「わたしも捨てたものではない」と輝く。同じものではなく違うものを前提で考える。『ヤマアラシのジレンマ』という言葉がある。ヤマアラシがおしくらまんじゅうをすると痛い。それで、針が当たらないようほどよい関係を保つ。または、ミカンが皮が厚いのでなかなか寄り付けないが、剥くとずるずるとなる。最初は壁が厚いが入ってしまうとずるずるとなってしまう。リンゴは、すぐ食べられるけれど、芯は食べられない。

携帯メールなど、常に見えてないといけない。他者と同質であることが圧力になってくる。度を過ぎると、なんでもかんでも一緒にないといけなくなる。たいへん窮屈な世界である。あの人は嫌だということになると、攻められる。

人間は、自分が必要とされたときに輝く。貢献価値。お前がいるから助かったと思えること。手伝ってくれというと、子どもはニコニコする。いつも遊びまわっている子どもに、「次の授業で使うけん理科室にいて模型をもって来てくれ。」と頼むと、その授業中はおとなしくしている。その授業で「自分」が役に立っていると思うこと。これが大事。

今の大人は頼みきれない。来てくれないと困る、出番をみんな待っている、そのようなときに場所を与えていない。舞台を作ったのせない。子どもは自分の出番がないと面白くない。必要な出番をどうつくるか。今は、一人でもなんでもできるので、つい、無視してしまう。この研修会でも、みんながしゃべってくれればいいと思う。でないとすぐ忘れる。

コミュニティスクールの目的は、学校を中心に地域の人にどんどん出番をつくること。充足価値とは生きようとする熱気、生命力、いつもフォローアップしていかないとけない。生き抜く力。そのような世界を少し手前でもっていく。姉妹がいる。妹は姉があんまりのことができるのならわたしもできると思う。上の子は下の子にとってちょっとがんばったら手の届く存在、それが大事。また、「楽しい」ということと、「楽する」こととは違う。楽しいことには苦勞がある。楽しいけれど、充実感がないというのではつまらない。

大人が輝いているときは、子どもも輝く。大人が夢中になって一生懸命やっていると、いつの日かは、自分もそうなりたいと思う。今は、目に見える対象がなくなっている。大人が輝やかなくてはいけない。欲望が欲望を欲する。熱気をもってやっとなかどうか。その上に誠意、創意があるのである。愛南町は、地理的な位置はよくないが、「なんとかせんといかん」という危機意識がある。それは、地域で子どもを育てる基本。基本は、充足価値・業績価値・貢献価値、和合価値である。

実践紹介シンポジウム

「愛南町オリジナルぎょしょく教育の実践」

～地元産業と教育活動の融合により地域振興へ～

愛南町水産課 兵頭課長補佐

家串地区出身

ぎょしょく教育について話をする。11月3日は地方祭、出し物が多い。1か月前から祭りの準備をしている。集落は10組に分かれてお宮当番をする。お宮当番とは秋祭りの手伝いである。

愛南町全体で人口が減ってきている。地域をどのように支えていくかと、始まったのがぎょしょく教育である。大漁旗は、講義に行った学校にプレゼント、最近は、魚の絵や人魚の絵を描いている。



愛南町の特産品をモチーフにぎょしょく普及戦隊「愛南ぎょレンジャー」をつくった。小学生が考え、南宇和高等学校の美術部の協力を得てデザイン化し、水産物のPR等のためにも活躍してくれている。愛南ぎょレンジャーは7人体制。実物として愛南町の小学5、6年生がコスプレして、イベントの中でクイズ担当をしたりしてがんばっている。

愛南町は、忘れ去られてしまうような地域。合併当時は29,400人だった人口が、現在は23,262人、南宇和高等学校の生徒が卒業するとさらに減る。町の活性化を望みたい。水産業は愛媛の基幹産業である。全国の20%～30%が愛南町で養殖されている。

25年度水揚げ14,400t、今年はここまで多くない。魚類、真珠、貝類、海藻類、の養殖などがある。真鯛については全国第2位。水産省でも愛南町の名前が知れている。また、5年生の教科書でも愛南町の漁業のことが取り上げられている。

現在、200億円ほどの売り上げ。売り出しているのは、「愛南びやびやかつお」のブランド化である。びやびやとは、釣った時に竿がゆれることをイメージしてつくった。最高鮮度の刺身となる。

また、平成20年、愛媛大学と連携して、南予水産研究センターができた。5年後、廃校となった西浦小学校を1億8000万ほど出して新しいセンターを開設した。町が管理して「うみらいく愛南」という名称をつけた。必要経費は、町が立て替えて、後で大学から出してもらうようにしている。

スマ・マグロ代替食材。低温で養殖ができるのは愛南町のみ。おなかにてんてんがある。ほしが

つおとも言う。大変美味しい、南方系の魚。養殖でしか味わうことができないのがスマ料理である。魚食をやりはじめたきっかけは、町の水産物を売り込む場所で、パイヤーに言われたこと、「知名度が低いので商品を買う理由がない」「地元でどんな風に美味しく食べられているか」と聞かれたことから始まった。

そこで、地元理解と購買を図るため、愛南町魚食普及推進協議会を設立、調理実習＋会食を繰り返し、学校給食での利用促進に努めた。しかし、ただ食べるだけでは理解が深まらないので、「ぎょしょく教育」という言葉遊び的なものをつくり、まずは愛南町からと、長月小学校から「ぎょしょく教育」を始めた。魚に触ったり、漁場（職場）に見学に行ったり、調理実習したりと、ニーズに応じた授業体制にした。

第2ステージとして、義務魚食。年に1回はどこかの小学校ですることにした。久良小学校児童は養殖場を見学し、城辺小学校児童は鯛の養殖を見学した。家串小学校ではひじきの収穫体験、地元の保育園、長崎保育所では生きたたこを持ち込んで園児に触れさせた後、中学校の生徒が調理をして一緒に食べたりした。

ぎょしょく教育は達成できているのか。効果はやればやるだけである。今年で11年目を迎えるが、成果と効果、目標が少しずつ変わっていつている。

例えば、カツオの解体ショーの依頼があるが、臭い。それだけで、嫌がる子どもも多かった。そこで、カツオ解体くんという模型を使うことにした。カツオは表面的なところではオスカメスカわからない。魚にも内臓がある。模型で説明をしてから、本物の解体をする。そうすると、真剣に見てくれる。胃袋解体すると、いわしがたくさん入っている。命がつながっていることを子どもたちに伝えている。第一ステージはクリアしていると思う。

東京都の水産課が同じ事業を展開していたので、電話をして交流することになった。東京都と連携して、東京都の30の小学校で魚食の出前授業をさせていただいた。学校給食用の水産加工物が東京へ行き、今年の給食の食材だけで3,000万の利益があった。また、関東地区で鯛めしをつくり好評だった。

さらに、家串小学校がアワビの養殖をしていたとき、地元のレストランに子どもたちがアイデアを出して、愛南のアワビとろろ丼、鯛を使ったタイレッ丼ができた。現在も、愛南の料理店で食べることができる。

第3ステージは、具体的に誰になぜしなくてはいけないかという課題に応えるべく、南宇和高等学校で講座を開いた。人材育成講座の開催である。水産人材育成事業として、南宇和高校生徒に赤潮と養殖業の講義をする。地元の人材を引き出して活躍してもらおう。それが地域に入っていく環境を作る。水産業の人材育成、後継者育成につながればいいと思う。



ヒジキブッコ



ヒガウキパール

Q:17年からぎょしょく教育といわれるが、だいたいどのくらいでここまでできたのか。

A:平成21年が第2ステージ。最初の時から少しずつ変わってきている。学校の考え方と合わせるようにしている。事前にアンケートをとってなにをしたいか聞いて対応している。10月は5年生対象に漁業の授業をしている。

Q:東京でも展開されているとのこと、愛媛県内では。

A:声が掛かれればどこでも行く。魚代と旅費をいただければ。来週は赤間小学校から子どもたちが来ることになっている。家庭科技術の研修会などにも呼ばれる。社会科の授業でやれるのでイベント的ではない。愛南町の子どもたちのように、沖にいった実感してもらおうのが本当は良い。

Q:東北とはつながりがあるのか。

A:2011年、夏ごろ、なにかできないものかと、福島の人に鯛めしを作り、むこうの給食会と連携した。福島の栄養士さんにも愛南町にきてもらった。(今年は、郷土の生んだ俳人、夏井いつきさんと一緒に東北へ行った。)

魚レンジャーの悪者として、たいふーん、ごみえもん、アカシオン等もいる。

河内晩柑は愛南町日本1である。今、愛南の養殖あまごを海に放して大きくして、ピンクサーモンにして売り出している。

Q:ぎょレンジャーはだれがデザインするか。

A:子どもの書いた絵を南宇和高校の美術部へ、さらにプロにお願いした。高校生、地域貢献していますよということで。

Q:お母さんの魚食教育はしているか。

A:保育所の保護者会で調理実習等をしている。毎月後方で、簡単レシピを紹介したりしている。香川大学の先生等呼んで講習会もする。子どもたちにはできることをしてもらおう。おかあさんは、子どもの向こう側でかかわってもらおう。

Q:地域の人たちとのかかわりは(水産課としては)。

A:公民館事業等で、子育て世代の人等を対象にする場合もある。ウミライク愛南で開催している。漁協の婦人部とかが指導者になって、いろんなメニューを調理実習している。

Q:魚代とかの費用はどうしているのか。

A:すべて町が支援している。東京の場合は、営業として漁協が支払う。

Q:松山でお願いしたい場合は。

A:魚代と、旅費をお願いしたい。

Q*最初に出会った子どもたちの中で、地域にかえてこの仕事に就こうという子がいるか。

A:地元に戻った子はいないが、愛媛大学の子が愛南に来てくれた。後継者をつくらなくてはいけな。仕事がないから帰って来れないということではなく、自分でその仕事をつくることを目的として帰ってほしい。

来年、八幡浜地区でぎょ食教育の取組がある。普及がメインである。進めていったほうが良いと思った。学校に来るのは、漁協の人だったと思う。機会があれば市役所などとも連携してやりたい。ぎょ食の入り口は、教育委員会と学校である。

学校ニーズと地元がやるのがマッチングさせると大丈夫。学校の授業にすっぽりはいることができれば、学校としては助かる。東京の学校では、愛南の方法をパッケージングしてくれている。

どんどん広がっている。子どもたちも海へ行ってそのすばらしさを体験するとまた、次につながる。学校の先生は知らなくてもいい。漁業関係者は聞かれることもまた嬉しいはずである。

漁協等の人たちは、もらったことがないので、学校からの子どもたちのお礼の手紙がとても嬉しいらしい。

総括 堺 雅子

地元の魚の普及から出発して、これだけ多くの「しょく」があるので驚いた。その広がりも素晴らしい。これだけの成果発表をここで終わるのはもったいない。東予や松山で、取組をやっていないところで発表していただきたい。どのようにマネージメントしていくか、それが、私たちの課題である。

